



撮影：五味明憲

記念講演

「井上 ひさし 協同を語る」

——宮澤賢治を通して——

私に宮澤賢治について話をしると仰せつかりまして、協同組合について勉強したこともふまえながら、宮澤賢治という一人の人物の中に、どういふ協同が芽生え、どう具体的に実行し、かつ挫折したのか。賢治の生涯をお話する中で、賢治を通して協同の精神が見えてくればと思います。

父を乗り越える闘い

皆さんは、宮澤賢治の作品を何かお読みになっているはずですが、それを前提にお話ししようと思います。宮澤賢治はちょうど100年前、1896年（明治29年）花巻に生まれました。賢治の家は花巻の名家で、宮澤一族は花巻の銀行、鉄道、温泉、オーバーに云えばすべてを握っていました。賢治の母方のおじいさんも、賢治の父親も所得番付の上位、両方とも町会議員で、町長も宮澤一族の一人という名家の出身です。

東北はだいたい3年に1度は凶作が来ると云われていますが、財閥というのは凶作の度に財産を増やしていきます。小作家が肥料や様々なことでお金を借りに来る、しかし払えなければ田んぼを担保にとる。たとえば弘前の太宰治の先祖は、明治維新の時ただの人ですが、農民に貸し付けたお金の担保をとって土地を増やして行きます。これは明治時代の東北での特徴的な動きですが、賢

治の家もそうです。

こういう家族には必ず息子の世代に反逆者が出てきます。太宰治もその一人ですし賢治も家を継ぎたくなかった。いろいろな証言が残っていますが、小学校の時には「父親の後をついで立派な古着屋になる」という綴り方を書いています。いま古着屋といいますが語感が悪いのですが、江戸から明治にかけて古着屋というのは、仙台、江戸、名古屋、京都あたりで前の年の流行もの、新品同様のものを買い取って地元で売るといふ商売です。前の年の都の流行ものといった贅沢品の古着から、農民が質入れした比較的新しい半纏とかを扱っている大きな古着屋で、お金も貸しています。小学校2年くらいの時に立派な商人になると書いていますが、だんだんと成長するにつれておかしいと思うようになる。やはりおかしいと思う人が一人や二人出ないと困りますが、宮澤一族では賢治がその役目をしました。

賢治は必死になって格闘しますが、父親の宮澤政次郎はなかなかの人物で（賢治を主人公にするいつも悪役ででてきますが）お金があるから罪滅ぼしもかねて、夏、中央から学者を花巻に招き仏教などの講座を開きます。町議でもあり、昭和の始めには長い間の町政への貢献が評価を得て、高松宮殿下から直にご褒美をいただくという、花巻にとっては大変な存在です。

賢治は、自分の一族は農民にたいして何をしたのかということに闘わなくてはならないわけですが、お金の面でも人生上の知恵の面でも父親にはかないません。そこで賢治は宗教で父親を乗り越えようとした。父親は信心深い仏教信者ですが、賢治は日蓮宗を学んで宗教で父親と闘います。

僕は賢治の生涯で一番すごい場面だと思っているのですが、妹のトシが亡くなり、父親の浄土真宗で葬式を執り行きます。賢治は葬式の場に出ないで、焼き場へいく途中（焼き場が火事で焼けて野原で茶毘に付すのですが）家の陰から、その葬列へいきなり「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱え行列に入っていきます。

農学校の時の生徒の証言はたくさん残っていますが、賢治は声が高く、しょっちゅう「おほっほっほ」と笑い、色白で小太りで、歌が好きで、突然すっとんきょうなことをする先生だという教え子の思い出は共通しています。

その賢治がものすごい張った、低いところからぐんぐん出る声で「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と、妹の葬列の後について行く。みぞれ混じりの風が吹いて妹を焼いている炎が風にあおられる。そこに賢治が手を合わせて妹が全部骨になるまで「南無妙法蓮華経」と、ずーっと唱え続けていたということとその場にいた人から聞いたこ

とがありますが、もの凄いいものが感じられます。

思想家としての賢治

ひとくちに宮澤賢治といっても、ファンタジーを書いた童話作家としての賢治もいれば、すぐれた、しかも今も通用するモダンな詩を書いた詩人、宗教家としても熱が入っていましたし、科学技師でもありました。今年評価されているのはファンタジー作家としての賢治ですが、もう一つ思想家としての賢治がいたということ、生誕100年のこの時に私たちは心に留めておくことが大事ではないかと思えます。

大正15年というのは賢治にとって大変な年で、5年勤めた稗貫郡稗貫農学校を退職します。稗貫農学校は郡が作った農学校です。今年の夏教え子の方に会って、授業中どんな先生だったか聞きましたら、「まじめでちゃんと教えてくれて、しかも自分たちが使う花巻の言葉で難しいことを教えてくれた」という。これは大変重要なことです。何故オウム真理教がだめだったかといいますと、オウム真理教の言葉で大衆に語りかけた。これはだめですね。偉大な宗教者というのは迷っている人の言葉で語るのです。いろいろな宗教を見定める時は、救われたいと思っている人、悩みを持った人たちに宗教の側が語りかける言葉の質をみれ

ば、その宗教がどれほどのものかわかるというのが僕の仮説です。

賢治は授業を生徒たちの言葉でやったということと、もう一つは教科書を使わなかった。賢治の立場でいいますと、農業のやり方はそれぞれの場所で違うのだということです。東北が米を作るようになったのは、たくさんの方々が苦心に苦心を重ね、品種改良を重ねて、熱帯植物の稲を寒いところでも作れるように長い時間をかけてやってきたわけです。たとえば鹿児島島の米作と仙北平野、花巻、青森それぞれ全部違う、東京で書かれた教科書では花巻の農業はわからないというのが賢治の基本的な立場です。賢治は授業のたびに自分でガリ版を切って教科書を作り、これが花巻地方、稗貫郡の米の作り方だと教えてくれたという。今考えるとすばらしい教え方だと思います。地方分権といえこれくらい地方分権的なことはありません。つまり今自分たちが立っているところ、そのところを勉強しよう。農業というのは非常に具体的な仕事ですから、中央で作られた一般論の教科書は必要ない。この具体性はここで発見して、ここで勉強するんだという考え方、これは私たちに一つの示唆を与えてくれるのではないかと思います。

大正15年は12月に昭和元年になりますが、この年の春、5年間勤めた農学校をやめて賢治はいよいよ羅須地人協会を始めます。その年の6月に有名な『農民芸術概論』を書きましたが、そこには“組合”や“協同”に関心のある人間なら吸い付けられるような言葉がたくさんころがっています。そして、11月に羅須地人協会が活動を始めます。花巻の下根子というところ、少しいくと北上川があって、賢治の作った畑や田んぼがあって、ちょっと小高いところに宮澤家の別荘があります。その別荘に彼は住み込んで活動を始めます。

ここでおもしろいのは賢治の考え方です。僕が翻訳しますと、近代工業社会は人間を一面的にするという、長い間村落共同体があって、これは評判が悪いのですが、決して悪いことばかりでなく今日本人が無くしてしまった隣近所（逆用され

ば隣組とかこわいものになります）とか相互に助け合ってきた、農作を基本にしてその上にそれを作る村々があり、そこに共同体が出来てきた。工業というのは必ず工場の近くに労働者を集めなければなりませんから、農村から工員を工場の近くに持ってくるわけです。そうして引き抜きにあった共同体はだんだんと変質していきます。さらに工業社会は、工員であるとか、事務方であるとか一人の人間を一色でしか見ません。多面体の人間を“働くやつ”というように一面化してしまうわけです。農民にしても、お祭りをやったり、村に伝わる芸能をやったり、日常はつらい労働をしながら様々な関係の中で生きていくわけですが、明治以降はもう一つ質が変わって、ただ働く、お前たちには芸能も文化も必要ないという形になってしまいました。

賢治がやりたかったことはその逆です。農民は田んぼで働くだけではない、農民は人間であって芸術だってやる、科学者でもある。作物を中心に、土壌を研究し、気象学者であり、植物学者であり、いろいろな学問を必要とするし、働く人でもある。賢治の場合はそれに宗教者というのが加わりますが、一人の人間はいろんな面を持たないと人間として生きることにはならないということが賢治の基本的な考え方です。

文化を通して人が生きる

賢治は自分も農民になったつもりでいました。農民芸術概論要綱の中に「俺たちはみな農民である。随分忙しく仕事もつらい。もっと明るく生き生きとする生活を見つけないか」と書いていますが、賢治は実体は伴わなかったが意識としては農民になりました。仕事はつらい、もっと生き生きした生活を生きなければならぬという、その生き活きはどこから出てくるかという、賢治の場合は大づかみにして云いますと文化です。まず、レコード鑑賞会をやります。そして賢治が一番やりたかったのが演劇。農学校で自分で戯曲を書いて、生徒たちに上演させてということをしきりに

る。それを日本に伝わっている演劇形態、歌舞伎や能や狂言で表現するのは不可能であるということです。19世紀末西洋でも、市民一人一人の心理を表現するということでイブセンやチューホフなどが近代劇というのを作り、それが30年くらい遅れて日本に入ってきました。賢治は東京へ出るたびに築地小劇場なども観ていたようですし、音楽劇などに興味を持っていたようです。新しい演劇を農学校の生徒たちとやりながら、その重要性を発見していったのだらうと思います。だからこそ文部省の喜ぶところではないのです。様々な人がそれぞれ違った場所で自分の力を発揮して一つの方向に向かうことは何となく危険だという、みんなが同じ方向を向いて、同じ事を言って前へ進む。近代国家を急いで作ったためそういう方向へ行きがちですが、そういうものと演劇は合わない、危険であるという官僚、この国の指導者たちの直感もあったのでしょう、結局文部省が禁止します。

賢治は普通の人とやるしかないと思ったのでしよう、羅須地人協会という農民組合を作った動機は様々だと思いますが、一つに農民劇団を作った、町の人に見せることによって、働くだけが人間ではない、楽しみ事、人を楽しませる仕事をしながら、農民は別の面を持たなくてはいけないことに気がついたのだらうと思います。しかし、賢治の農民劇団は成立不可能です。羅須地人協会の講座そのものが警察の監視の対象になります。組合の納会とか、常会とか名目がはっきりしていない、やっていることが莫としていて警察から危険視されるのです。時代が悪いと言えば悪いのですが。

花巻の賢治記念館で僕が一番好きなのは、弦楽四重奏団のための譜面台です。羅須地人協会で弦楽四重奏をやろうと、賢治が設計して鍛冶屋に特注した譜面台です。これが傑作で、4人が一つの譜面台を囲んで演奏できるようになっている設計的に優れた譜面台ですが、根本的な欠陥がある。上下に高さを調節する装置もついていて、真ん中の柱に一人一人が見えるよう台が枝分かれしてい



やっていますが、賢治が農学校をやめたのは本気で劇団を作らなかつたのではないかと勝手に僕は考えています。大正13年に学校演劇禁止令というのが文部省から出ました。学校での演劇はもちろん学会も禁止です。

演劇が本来持っているのは、芝居をする時にいらぬ人はいない。それぞれがみんな自分の仕事が見つかる。みんなの前に立って演技をしたい人ばかりではないのです。暗くなった時装置を変えとか照明とかそういうことが楽しくてしかたがない人とか、裏で支えるほうがいいのか、それを興行的に支える方がいいとか。芝居を書きたいとか。プロデュースしたいとか。すべて人間が持っているいろいろな才能は、演劇に集中してポジション化しています。賢治は東京に何度か出てきていますが、行けば必ず芝居を観ています。当時日本の新劇運動が始まる頃で、大正デモクラシーや第一次大戦が終わって世界的に平和のムードも出てくる、軍縮も始まる、いろいろな雑誌が出る、小説家も登場する、世の中がガーンと変わって

るのですが、4人の奏者の背の高さは様々です。背の低い人に合わせると全体が低くなり、座高の高い人に合わせると全体が高くなる。調節にならない。賢治という人はおかしな人だ、とんでもなく気が利くけれども、どこか根本的に抜けているなという感動が譜面台から伝わってきます。

ともかく音楽をやるというのはカモフラージュで、組合運動や社会主義運動の集まりではないか、労働農民党の支部ではないかと、いろいろな疑いをかけられてやがてできなくなるのと同時に、賢治たちの腕が上達しなくて諦めました。楽器は花巻の映画館に貸し出されました。当時まだトーキーではなくて、画面にあわせて楽団が演奏し、弁士が説明するという時代ですから、賢治たちの楽器は映画館で使われました。

時代のせいもあります、楽器もだめ、演劇もだめ、講座をやってもあやまれる。今まで来ていた人がだんだん来なくなる。なかなかうまくいきませんでした。

ただ賢治がやろうとしていたことは、一人の人間が一色に染まってかたづけられてはたまらないということです。学者・まじめ・勉強家といった世間の常識が、いろいろな職業の人にステロタイプを押しつけて、それがまた押しつけられた方は、おれは学者だからこう生きなければ行けない、おれは農民だからこうだ。よく「分」という言葉が日本で大事だといわれますが、ひっくり返しますとそれぞれの職業にはそれぞれの分があってそれを越えてはいけぬ。大工はこうだ、魚屋はこうだ、工具は、学者はと。小説家は女と金と病気で苦労しなければならぬと。人間の心を書く小説家でさえ、小説家というのはいは無頼であって、とレッテルを貼られる。

賢治がやろうとしたことはレッテルを剥がすということです。レッテルを剥がすためには意識を変えなければいけない。農民というのはただ働いて、年貢を納めていけばいいという、それだけで自分たちは一生を終えていいのか。おれたちも人間である限りは他のことをやらなければだめなんじゃないか、という大きく意識を変える運動だっ

たと思います。農民の意識をかえてもう一度、人間の間を組直そうと志した人ではないかと私は思います。

死の瞬間の微笑

賢治は童話作家としてファンタジーのすばらしい書き手として、あるいはすごい詩人として、我々が彼の残した作品を楽しんだり、感動したりするのは大事なことです。もう一つ大事なことは人間は多面体であり、そのいろいろな面をきっちり自己表現した時、その人はこの世に生まれてきた甲斐があったんだということです。

賢治の童話の中でたくさんの動物たちが死んでいきますが、その最後は、主人公の動物が生きる意味を悟って死ぬ瞬間があります。『よだかの星』とか。その時の書き方は全部同じです。「うすく笑っていました」とか「かすかに笑ってました」と。死の瞬間みんな小動物たちは微笑する。それも自分の思いがけなかった所を発見して、これが自分の一生で大事なことだったんだと発見した瞬間に微笑して死ぬんです。死ぬ瞬間に微笑するというのは、賢治の中で一番大事な考え方で、死ぬ瞬間に微笑できるかどうか賭けていたのです。微笑するためには、自分の生き方を見つけて、おれは人として生きたんだと納得しないと微笑できません。

人間が自分を発見するということはどういうことかと言いますと、人間は様々な可能性をもって、様々なことができるという。赤ちゃんはあらゆる言語に対応できるようになっていますが、親が日本語で囁きかけてくるから、いろいろなものを捨てて、日本語の構造に脳を合わせていくわけです。でもほんとうはあらゆる言語に適応できます。人間はあらゆる可能性を持っているのに、それが世の中の制度、常識でお前はこういう生き方しかないんだと強制されているわけです。それに対して賢治はおかしいと疑問をもって、農民は働くことを要求されるという世の中の制度そのものですが、農民には芸術家の面もあるのではない

か、宗教者としても、科学技師としても生きるべきだし、元々持っている人間の可能性を当てはめていったひとつのリポートが賢治の作品ではないかと私は思います。

もう一つ労働党に対する賢治の援助の仕方というのは半端ではありません。選挙の時、花巻地方から労働党の候補者が立ちますと、お金を出したり、事務所を提供したり全面的にバックアップします。当時、共産主義・社会主義というのは、燎原の火のごとく日本を焼き尽くして、芥川龍之介にしても有島武郎にしても、そういう新しい時代に自分は生きている必要はないのではないかと、所詮自分はプロレタリアートにはなれないと、有島はある意味で自殺してしまいますし、芥川の不安はそこにあるぐらい、当時の人にとってはどういう風に社会主義と向かい合うのかという場に立っていた。賢治も大正デモクラシーから自然にそこへ結びついていった、若い人たちはみんな無政府主義を経て、社会主義、共産主義へと寄っていった時代です。賢治には、社会主義者、理想主義者としてのところもあります。

時間のユートピア

賢治は最終的にユートピアを何だと考えていたのだろうか、賢治のユートピアが何かを中心に僕は考えてきました。私たちは常に、必ず時間には負けるのです。100年たてば我々誰もいなくなります。人間は時間にはどうしても太刀打ちできません。しかしユートピアというのは、時間に対して一時的ですが、逆襲をするのです。つまり、時間を忘れる。おもしろい話を聞くとか、同級生とばったりあって酒でも飲んでわーっとならべたり、小説を読んだり、芝居を観たり、時間の存在を忘れる。その間はすくなくとも時間を人間が征服しているのです。ここは詳しく賢治の作品について言うといいのですが…時間がありません。賢治のユートピアは時間のユートピアです。

人間がどれだけ時を忘れるか。我を忘れるか。演劇も小説もすべて文化というのは、時間に対す

る抵抗なのです。ささやかな抵抗です。その絵をみている、その音楽を聞いている、その小説を読んでいる、その芝居をみている、その時に、時間を忘れて我を忘れる。これが時間系列の上で成立するユートピアです。これ以外にはありません。空間的なユートピアは、だいたい強制収容所みたいになってしまいますから。お仕着せで、同じ物を食べて、子どもを全部託児所へ入れたりして。

時間にはかなわないけれども、時間を乗り越える力が人間にはある。最後は時間には負けませんが、グスコブドリは実はその問題なのです。仲間でも話し合い議論しているとき、時を忘れるその積み重ねが結局は、人類は時間に征服されるけれども、それに対する抵抗を続けるということが、賢治の最大の問題で、負けたときに俺は時間のユートピアをたくさん作ったんだ、だから満足だということで、かすかに微笑する、という仕掛けになっています。

後半駆け足になってしまいましたが、書いた物を読んでいただくとか、またじっくり協同について語るこういった機会のあることを望みながら終わりにします。

(文責：編集部 この原稿は当日の講演のテープをもとに編集部の責任でまとめたものです。)